甲州街道　猿橋宿

猿橋宿は、江戸より二十三里十丁余り、宿の長さは十一丁三十四間、宿内の町並みは、東西三丁三十四間、宿高は二百四十六石一斗余り。天保十四年（一八四三）人別五百四十二人、家数は百三十八軒で、本陣（建坪八十坪）・二軒の脇本陣（建坪七十八坪と七十五坪）・十軒の旅籠（大二軒、中五軒、小三軒）があった。その他にも、町の中宿に問屋場があり、年寄りと馬差が詰めていた。当時の問屋場は、荒井六郎兵衛家（現在の幡野逸雄家の祖先）であった。問屋場の隣りは、郵便中問屋で現在の幡野　厚家である。又、本陣は、現在の松葉地内の安戸家の宅地であり、脇本陣は、仲町の岩井屋（高橋）家の宅地である。

猿橋宿は、日本三奇橋の一つである猿橋を有し、甲州街道の要衝であって、寛文十一年、宿駅となる。当時、現櫻町に探月庵というお堂があった。お堂は、火災により猿橋南岸に移転したが、明和初年、再び火災に遭い、今度は、人家の無い所が良いと言うことで、現霞町地内に移転して、狐円山心月寺と言う寺になった。

猿橋も明治になると、北都留郡の中心地として、明治十年、橋畔に猿橋警察署が開署された。翌十一年、現在の幡野房吉家（塩屋）の北側に北都留郡役所が開所された。明治七年には、心月寺に寺小屋ができたが、同二十六年、心月寺の屋根替え工事の為に、寿町の奈良五郎左ヱ門方（現在の猿橋一四三番地）に移転した。明治二十年頃は、校長は小尾　幹、戸長は杉田輝州という人であった。

当時の寺子屋の授業料は、一年生十銭、二年生十三銭、三年生十六銭、四年生二十銭であった。

寺子屋は、明治三十六年に小柳町へ移転し、同四十一年に大原尋常高等小学校となった。

明治以前より、宿内には五ヶ所に石橋があり、その所在地は、権現坂、西木戸、さむ地、ごんたい川、花水という地名の所である。

明治三十三年に中央線が開通した。駅を町の中に置くことには、反対が多く、結局殿上になったのだそうです。

明治二年に官軍の兵隊三百五十三名が、御伝馬所の割り当てにより、宿内に宿泊している。

明治五年に猿橋の橋板から上の工事があった。世話人は、奈良賀蔵（戸長）、松葉屋利一郎、知見浦五郎、尾西屋七郎左ヱ門（脇本陣）、住吉屋六左ヱ門、大黒屋矢切小八、森川伝蔵等であった。

【菊守見外】

甲斐国都留郡猿橋の人、本名は甚作。江戸に出て、日本橋石町に住み、谷川護物に俳諧を学び、後に、江戸では大家の一人と言われた。明治六年二月二十日六十七歳で没した。猿橋の橋下に『甲斐ヶ根や奥は紅葉の日和冷え』と言う句碑がある。この見外の句碑は、昭和二十七年に仁科探月洞の老人と下和田村の車屋の谷水老人が建立した。

平成九年十一月十四日

幡野房吉